

寒い季節のピークも過ぎ、これから暖かな春を迎えようとする時期、大本山永平寺や大本山總持寺を始めとする修行道場では三ヶ月間の冬安居（ふゆあんご）と呼ばれる集中的な修行期間を終える時期を迎えます。この終了の事を、解くという字に制度の制と書いて「解制(かいせい)」と呼びます。

現在は修行僧があちらこちらの修行道場を頻繁に行き来することは少なくなりましたが、かつては様々な指導者に教えを乞うため、或いは仏教の教えを広めるため、行き来が盛んな時代もありました。しかし雨や雪、特に気温の低い時期の天候不順の影響、及び志を同じくする修行僧たちとの集団生活を通じた修行が重視され、一ヶ所定住型の修行生活が広く行われるようになったようです。

その一方で集団生活をするという事は様々な問題や軋轢^{あつれき}を生み出すことにもつながります。お釈迦様の時代には、問題が発生するごとにその対処法が「律^{りつ}」という規定として次々と制定されましたし、また仏教が中国に入り、禅の修行道場が誕生するのと相前後して「清規^{せいぎ}」と呼ばれる禅宗独自の生活規則も制定されました。安居^{あんご}と呼ばれる三ヶ月間の、原則外出が禁止される集団生活の間は特にこの規則が重んじられる期間でもあります。その三ヶ月間の厳しい規制を一旦解除するという意味で、安居生活^{あんご}の区切りのことを「解制(かいせい)」と名付けたのです。

修行を進展させるために外部とのむやみな接触を断つことは大切ではありますが、集団生活は息苦しさやトラブルも抱えるものです。そこで例え形式的ではあっても、一旦三ヶ月を区切りとして厳しい規制を解除することで集団の再生を図るのです。とりわけ集団生活を共に営んできた修行仲間の旅立ちや、新たな修行僧の加入は集団の活性化につながるものです。仏教においてサンガと呼ばれる集団が二千五百年余りの長期にわたって存続できたのもこの安居^{あんご}という集団生活とその解除という形態を通じて修行僧たちの集団がメリハリのある出入り^{ではい}を繰り返してきたからに外なりません。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

最後にこの「解制(かいせい)」に当たって忘れてはならないことがあります。三ヶ月間に亘る^{わた あんご}安居を終えるにあたっては、必ず反省する機会が設けられているという事です。その間に起こった様々な出来事や問題点を振り返り、良かった点や悪かった点が省みられることで、修行道場の発展と、修行僧自身の向上が期待できるのです。

「解制(かいせい)」の当日には、互いに三ヶ月間の^{ろう ねぎら}労を^{ぎょうじ}拵うために交わされる挨拶の行持が行われます。挨拶を交わし合う修行僧たちの表情はきっと三ヶ月間を終えることの出来た安堵感、修行僧としてまた一段歩みを進められた自信、そして苦労を共にした修行仲間たちへの感謝で満たされていることでしょう。

— 終 —